



ミカタをマナブ

具体大学2013 →

utai University

2007年からサラリーマン稼業の傍らで、アーティスト支援のNPO「ワオンプロジェクト」という団体の代表として大阪を中心に数々のイベントに取り組んでいた僕は2012年当時、約5年間“アウトサイダー”として取り組んだからこそ、2つの問題意識を現場で感じていた。

1つは、いわゆる数多くの「アートイベント」が日々行われているにも関わらず、イベント開催者同士の交流が頻繁に行われているかと言えば、そうではなく。またお互いに良いところや悪いところをフラットに話し合う事も結果、行われていない事から、大阪、関西の外に出て眺めると何年たっても（個別事例は別として）「まるで何をしているか外部に伝わっていない」という問題だった。その事で「ジャンルを越えた交流機会の不足」「批評の不在」が起きているのでは？と思ったのだ。

もう1つが、そもそも日本の美術館来訪者は世界有数にも関わらず、またこれだけ数多くの「アートイベント」が行われているにも関わらず、いつまでたっても新しく関わる人や観客が増えておらずに常連ばかりで、しかも現実的に高齢化しており「新しい層を取り込めていない」問題であった。これは大阪や関西といったローカルに限定した話ばかりではない気もしたが、いずれにしろ、どのような業界、分野であれ、当事者（アーティスト）や関係者（ギャラリーや美術館）がどれだけ頑張っても、実際に「関わる人、観る人」が新しく増えていかなければ、いつか“じり貧”になるのは自明の理だとも思ったのだ。

前者についての解決策としては、別に「伝書鳩」（2011年～2013）そして「クリエイティブアワード関西」（2013年～）というプロジェクトで現在も進行中なので割愛するとして（もしくは“つながりの力”を参考にしてくださいと幸い <http://p.booklog.jp/book/117404/read>）



この本「ミカタをマナブ」では後者の問題に対する解決策として、実際にアートに「関わる人、観る人」を新しく増やす為に、補助線を引く為にコツコツと取り組んできた、あるいは取り組んでいる試行錯誤。辻大地氏との共同プロジェクトとして2013年3月に始まった「art☆fun」（現art air）それから2014年から個人的に始めて今にいたるエンタメ美術史講座「具体大学」の活動について紹介させていただきます。

その事が、まったくの0からアート（美術）を学びたいと思っている人や、これからアートに「関わる人、観る人」を増やす為の活動をしようとしている人の参考になればと思っています。

さて、”新しくアートに「関わる人、観る人」を増やさなければ”とは思ったものの、具体的にはどうしたらいいのだろうか？そんな時に思いついたのがWEBメディアとして当時（少なくとも関西では僕の知る限り行われていなかった）「アート番組」を新しく立ち上げる事だった。そう思いついたのは2013年当時、僕自身は行っていなかったが、既に各地でWEB動画共有サービスUstreamを活用して気軽に（今みたいにスマホ片手にとはいかないものの）ライブ配信が盛んに行われている状況だったのが大きい。（Ustream自体は2017年にIBMに買収され、今後ブランド名が消滅予定）

そして「アート番組」自体の立ち上げはこのUstreamを活用する事でなんとか目処がたった後、次に考えなければいけない大切な事は、とかく難解な言葉で語られやすい「アート」をわかりやすく日常的な言語に咀嚼してして伝えてくれる人を探す事だった。こちらは以前から面識があり、またその語り口の明瞭さから団体のイベントでも講義をしてもらった事もある「こどもアートスタジオ」運営、そして自らもアーティストである辻大地氏に話を持ちかける事で解決した。そもそも彼自身が月1回位のペースで「アート番組」をかつての教え子の「アート難民」対象に行いたいと考えていたからだ。



こうして「まずは一緒にやってみよう」と大阪は本町で気軽にライブ配信できる機材を揃えていたUSTREAM STUDIO CAFE(2010年10月に開店、惜しまれつつも賃貸契約の終了により2014年12月閉店)で2013年3月に記念すべき第1回を行った。番組の名前は主役ともいえるメインキャストを務める辻大地氏さん命名により”アートを楽しむ、あるいは手紙”といった様々なニュアンスを込めて名付けられたアート系トーク番組「art☆fun」。今見直すと音声が最初出なかったり、機材面での不安で収録終了まで緊張していた時間だったのを思い出す（こちらは自分達では使い慣れておらず、別プロジェクトでお世話になっていた当時大学生の今田氏に完全にお任せしていた事情もある）<https://www.youtube.com/watch?v=1rZFz6c3PGs>

ともあれ、このようにして始まった「art☆fun」はその後、辻大地氏単独により継続的に放送され現在は「art air」 (<http://artfun.web.fc2.com/ustream.html>) と名前を変えて続けられる事になる。今では知名度をあげて関西以外でも「関西のアート事情と言えばart airを見ている」とアーティストから声をかけられる事もあり、その立ち上げに少しだけ貢献できた事を今でもこっそり嬉しく思っている。

その一方で「アート番組」を「アーティストやアートに関わる人」向けに無事に始める事ができたからこそ、僕は違う事をまた考え始めていた。それは本人もアーティストである辻大地氏とは別に、サラリーマンであり、かつ美術を「専門的に学んだ事も教えた事もない」いわば素人である僕だからこそ、もっと「アートの外側の人」例えば”休日に美術館にいても本当は何だかよくわからない”そんな密かな欲求不満を抱える人に何かしら補助線をひけるのではないか？という事であった。そして、もしそれができるなら「art☆fun」とはまた別のボトムアップができるのではないか？とも思ったのだ。

しかし卒直に言えば、その事が本当に「僕にできるかどうか？」の実現性に関してはとても不安でもあった。当たり前だけど、取り組む限りは無責任な事はできないし、かと言って当時の僕は（今もまだ未熟だが）「アートイベント」はともかくとして「美術史」を系統だって話せる知識は全然なかったからだ。

こうして2014年1月に「具体大学」をスタートするまで「本当にできるだろうか？」を模索し準備する時間が必然として始まった。

## 0から始める準備時間

---

さて、どうすれば「美術を専門的に学んだ事も教えた事もない」僕が、例えば”休日に美術館にいても本当は何だかよくわからない”そんな密かな欲求不満を抱える人に補助線をひけるのか？

実際には当初”やはり誰かにお願いするべきなのではないか？”と自信がなかった事から、その前に様々な美術関係者に相談させていただいたりもしたのだが、どなたにも「必要性はわかる。ただ美術とはそれぞれが自由に感じるべきだ」とやんわりと断られ続ける中で「やはり、自分でやるしかないか」とかえって覚悟も決まった。「無責任な立場」だからこそ僕しかできない事は必ずあるはず。そうとも思ったからだ。

そんな中、まず相談する事にしたのが、美術鑑賞の基礎知識と心構えを全12回の講座として行っている「トリ・スクール」 (<http://tri-president.blogspot.jp/>) 学長、美術家でライターである岡山拓氏だった（僕自身がかつての”教え子”でもあったからだ）主に相談したのは2つ。1つは講義をする際に「どのような点に注意したら良いか？」2つ目が「講義資料のテキストベースにするにはどれを選んだら良いか？」今はもう前者についてのアドバイスは失念してしまったのだが、後者については中学校や高校の美術の教科書を”最近では以前と違い、随分と洗練されているので使用してみても？”と提案されているのを覚えている。

何より嬉しかったのは別れ際に岡山拓氏に「平面を中心に話して問題ない西洋美術史なら何回か話せば（僕でも）出来ますよ。うち（トリ・スクール）以外に意外にそういった鑑賞講座してる所がないので一緒に盛り上げましょう」と応援していただけた事だ。（この時は半信半疑ではあったが）随分と気持ちが楽になった。

さて、次に「具体的なスケジュールや内容」を考えた。僕自身の勉強時間を考えると2013年中にすぐに始める事は流石に出来なかったので、まずは半年後の2014年1月からのスタートと決めて、毎月1回の講座として1月から10月まで年10回行う事に（内容は前半の5回が西洋美術史、後半の5回が日本美術史）そして講座の中身については全体で2時間として、前半1時間が終わった所で「その時の内容に沿った形の」休憩も兼ねたワークショップを15分ほど挟み後半へ。そして講座が終わった後はこれまた「その時の内容に沿った形の」料理を仲間にお願ひして（今考えるとかなりの無茶振りですね。これ）交流会を行う事とした。



多少、構成を詰め込み気味な気もしたが、これは自分の話だけでは”2時間も持たないだろうな”という不安の裏返しであった面もあるし、とはいえ「だからこそ」参加してくれた人が気軽に楽し

める「エンタメ」を意識した面もあった。

最後に、そして一番大事で悩んだのが軸となる「講義資料のベースとなるテキストの選定」だった。せっかく「トリ・スクール」の岡山拓氏にすすめていただいた中学校や高校生の美術の教科書であったが、取り寄せて検討した結果た、確かにビジュアル的にも洗練されているし、場面場面で考えさせる内容で魅力的ではあったが、そもそものベースが0である僕自身が講義に使用するには求めている情報量が足りなく感じたのだ。とはいえ、他にも様々な美術史入門書を手に入れ比較したものの、こちらはこちらで卒直に言って「ただ作品紹介を写真付きで羅列している」あるいは「難解な説明でわかりにくい」ものが思った以上に多く（少なくとも僕には）「使えない」ものばかりだった。

結局、こちらもお世辞にも文章的にはいかななものかと思ったが、僕自身が勉強の成果を試す為に受けようと考えていた「美術検定」公式テキストをベースとして参考にしながら、自分で咀嚼して補強しながら毎回「0からパワーポイントで資料を作成する」事にした。あれもこれもと詰め込みすぎてしまってスライド枚数としては多すぎてしまったりする事が多かったが、今振り返ると、この作成過程で何度も何度も「誰かに話す事」を意識して何時間も資料を作成できた事は「自分の自習時間」として良かったと思っている。

準備としては、他にも、とにかく美術史や美術作家をテーマにした映像作品を観る事もした。そうして写真や図表ではなく映像でイメージを膨らませる事で話す際に「よりわかりやすく」伝える事ができると思ったからだ。とはいえ、こちらも美術作家をやたらと神格的に描いている作品（特に日本制作に多い）や、無闇に映像自体の構成が”何を伝えたいのか？”難解な作品も多く、思った以上に僕が求めている「わかりやすい」映像作品が少ないのには辟易した（ちなみにBBCアートシリーズが個人的にオススメです）

ともあれ、こうして自分自身も学びながらではあったが、2014年1月。はじめての講義を行う事となる。全体の名称には、それほど拘るつもりも（余裕も）なかったが、僕自身がアートの世界に入るきっかけとなった、かつての前衛芸術グループ「具体」へのリスペクト、そして”それぞれが自由に”とはあえて違い「具体」的にの意味を込めて「具体大学」と名付けた。

何事もはじめてというのは緊張するものだが、2014年1月の「具体大学」としての最初の講義もやはりそうで強く印象に残っている。特に大学で美術史を専攻にしていた方も参加者として来ていた事から「話をしている内容の正誤判定」を無言でされているようで、正直生きた心地がしない気分だった。

加えて、美術史の導入部分となる”はじまり”の1回目は言い訳がましいが西洋美術史、日本美術史いずれも実質的に古代の歴史がメインになるので、その範囲の広さをどうまとめるか？についてが難しい部分もあったし、何より「美術検定」から引用している言葉自体を事前にシュミレーションを重ねたのに関わらず、この時の僕自身が実質的に消化しきれていないと感じる箇所も話しながら所々にあって、思い返すに随分と雑な内容ではなかったのか？と今でも反省しきりである。

ただ、せめて参加してくれる人を飽きさせない様に、毎回、小ネタを仕込んでいたり、また、フラットに作品を鑑賞できるように、とかく神格化されがちな美術作家自身は身近な存在に感じてもらおう為に、あえて原則としてボロカスというか「普通の人」として紹介する事を心がけているのだが、それぞれに喜んでもらえたのは「エンタメ」美術史講座としては良かったのかな？と思っている。具体的には例えば「ルネサンス」の回だとこんな感じだ。



”みなさん、脱線ネタで恐縮ですが、料理のカルパッチョの由来って知ってますか？（会場しばし眺める）知りませんよね？これも実はイタリアで1400年～1500年頃に活躍していたヴィットーレ・カルパッチョという画家からきているという説があるのですね。彼自身が薄切りの生牛肉にチーズをかけて食べるのを好んだ所からという説、あるいは料理の色が彼の作品の色彩に似ている所からという説の2説あるみたいですが。”

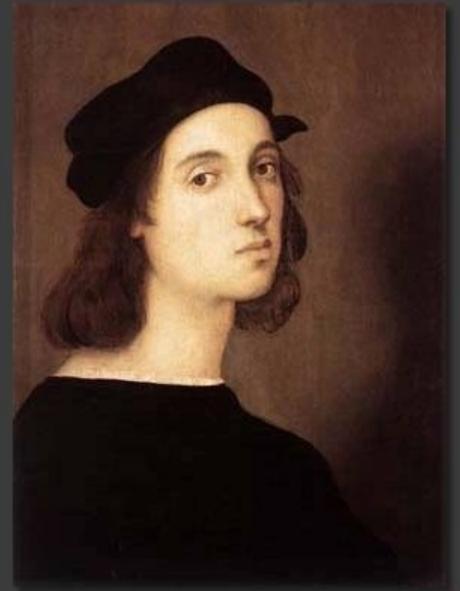
あるいは。。



レオナルド・ダ・ヴィンチ:  
1452-1519  
《自画像》



ヤコピーノ・デル・コンテ  
《ミケランジェロの肖像》  
ミケランジェロ: 1475-1564



ラファエロ: 1483-1520  
《自画像》

ルネサンスの3大巨匠と言えば、ご存知、同時代に生きたレオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ラファエロの3人なのですが、この3人を作品だけを見て「天才達」と一括りして見るのではなく（画面に3人の顔を映す）少年愛のいわゆるショタコンおじいさんのレオナルド・ダ・ヴィンチ、ガチムキホモのミケランジェロそれぞれのどうしようもない足のひっぱりあいを眺めながら、ブラック企業経営のラファエロが間を抜けて出世しようとしたものの、こちらは女性が好きすぎて梅毒でダウン。そんな風に気楽に眺めてはどうでしょうか？

。。こんな感じだった。

まさに死人に口なし。真面目な美術ファンには本当に怒られてしまうかもしれない。ただし、僕からすれば、悪意があってしている訳ではもちろんなくて、この位やわらかく紹介しなければ有名な作品をつくっている人は（当然）人間的にも非の打ち所のない人はずだ”そんな前提で紹介されがちな洗脳を真に受けている人（僕自身は「作品」と「人間性」それぞれわけて考えるべきだと思っている）の「洗脳をとく」強度がないと思っていた事からの「あえて」という部分があった、また自由に言いたい放題の様に見せて「正しいとされている事を正しく話す」事自体は同時に「それでも」ちゃんと守るようにしていた。

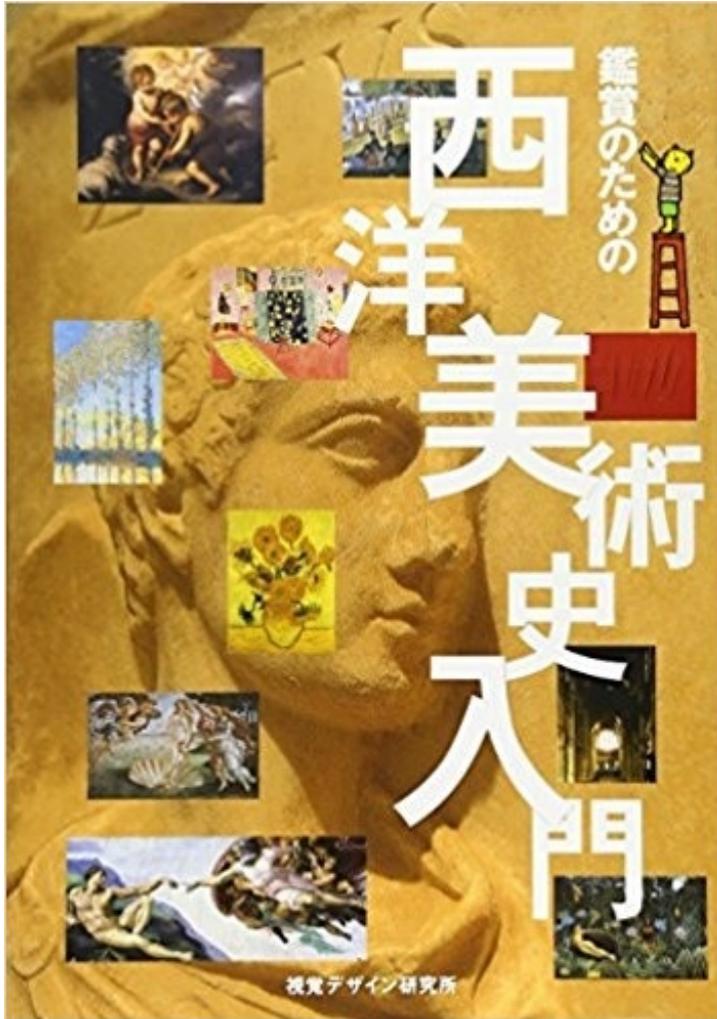
そして、結果的に講義とは別に毎回「仲間との対話」になった「その時の講義のイメージで料理を作り、提供する」こちらも「印象派的な感じの料理で」とか「今回は抽象でシンプルに」とか料理をお願いしていた仲間に対する無茶ぶり感が半端なかったなど、今となっては申し訳なかった部分もあるが、こちらが講義を終えて疲れた参加者にとってサプライズ的な演出となり概ね好評だったのも嬉しかった。

ちゃんと記録写真を撮ってれば、実は「対話の中から生まれた料理作品」として、まとめると

良いものになったと思うのに、そこまで余裕がなくて結局出来なかったのが今となっては残念である。この2014年度の初年度以降は主にお願していた仲間への負担を減らすために、この「ラボ料理」は行っていないが、また形を変えてチャレンジ出来たらとは考えている。

## おすすめ資料紹介

さて、ここであくまで個人的な主観ですが、僕が主に西洋美術史の資料作成及び講義中のネタに参考している本、および映像作品を幾つかセットで紹介する。「美術史に興味あるけれど、どの本を読んだらいいかわからない」あるいは「美術に興味のない人になんとか面白さを伝えたい」そんな方とか参考にしていただけると幸いです。



「鑑賞のための西洋美術史（視覚デザイン研究所）」

「101人の画家-生きていることが101倍楽しくなる（視覚デザイン研究所）」

何十冊か美術史の本を読む中で、結果として、また現在も具体大学の参加者全員にオススメしているのがこちらの2冊です。どちらも視覚デザイン研究所ですが、「鑑賞のための西洋美術史」はまさに視覚的に西洋美術史全体の流れをイラスト等で明快に紹介していてわかりやすく。また「101人の画家」は同じイラストの方で作家それぞれの人生に焦点をあてて、小ネタぎっしりで紹介していておすすめ。合わせてどうぞ。

「美術男子（ポストメディア編集部）」

「乙女の美術史世界編（実業之日本社）」

「さよならソルシエ（フラワーコミックスアルファ）」

「美術男子」「乙女の美術史世界編」に関しては、イラストも含め多少人を選ぶかもしれませんが、主に腐女子向けを対象にしているであろう視点が、また違う「ミカタをマナブ」為に、また、そう見せかけて、こちらも美術史に興味のない方でも、へえーと感じさせる事のできる小ネタが沢山あって参考になります。（少なくとも人気の”怖い絵”シリーズより、こちらの方が面白いと思うのだが。。）マンガ大賞も受賞した「さよならソルシエ」は単純に漫画作品としてこちらはこちらで良作です。

「刺青とヌードの美術史 江戸から近代へ（NHKブックス）」

「ふしぎの国のバード（ビームコミックス）」

西洋から輸入された文化及び美術という概念が明治時代の日本にどのような影響を与えたのか？新鮮な視線を与えてくれる2冊です。前者は最近でもニュースで話題になった刺青について、いわゆるサブカルチャーではない形での紹介がされていて興味深く（生人形も）、また後者は連載中の漫画ですが、イザベラ・バードという実在の英国の女性冒険家の視点から紹介される当時の日本が生き生きと描かれていて面白いです。



「ミケランジェロ-神の手前後編（BBC）」

「印象派 若き日のモネと巨匠たち（BBC）」

映像作品として美術の楽しさを万人に伝える事ができる2作品がこちら。どちらも海外ドラマなのでBS放送で視聴できたり、TSUTAYAでも借りれるのも魅力的。ミケランジェロの方はディスカバーチャンネルらしく”実際に再現して見ましょう”がやや回りくどいですが、なんといってもミケランジェロ役の俳優さんの怪演が強烈な印象を残します。また「印象派」の方は主要な女性作家とかピサロとかの紹介がバツサリ切り捨てられているのが不満だが、それもあってかモネを中心に”努力、友情、勝利”と某少年誌のノリで楽しめるので参考資料としても作品としてもバランス良く楽しめるのが素晴らしい。

「カラヴァッジョ 天才画家の光と影（配給ポニーキャニオン）」

「フリーダ（配給KADOKAWA）」

こちらは、そもそも作家の背景を知っていないと、また多少というか確実に美化されている気もしますが、それはそれとしてドラマチックな魅力のある2作品です。なぜか僕の周囲では嫌いな人が多いのですが、個人的には大好きなカラヴァッジョは「画家にして騎士」「天才にして犯罪者」がかっこよく描かれていて、また「フリーダ」は映像が美しく、また特に女性向けにおすすめしたい作品。イサムノグチ出てませんが（笑）

と、ここまで紹介した本、映像作品はどれもハズレなくおすすめできますが、もしその中でもさらに本と映像作品を誰かに1つずつ選ばなければいけないとすれば、本は「鑑賞のための西洋美術史」映像作品は「印象派 若き日のモネと巨匠たち（BBC）」のコンビが個人的にベストと考えています。

## 1から始めた補強時間

こうして、自分なりに何冊もの本を眺めて咀嚼して準備し、毎月講義という形で話してはまた来月に向けて咀嚼して準備する。そんなサイクルで2014年、2015年、2016年と年10回のサイクルで曲がりなりにも合計30回話した事で、美術史の資料だけでは足りない部分に対する知識の補強も必要だとわかってきた。それが個人的には美術史の思想的バックボーンとなる「哲学」そして明治に美術という概念が逆輸入されてきたからこそ国内で生じた「伝統芸能」についてだった。



この「哲学」「伝統芸能」両方とも「具体大学 番外編」という形で「具体大学」と平行してイベント化して行う事での咀嚼をさっそく試みたが、一通り「美術史」を眺めた後だったからこそ、新しい負担が増えるというよりは、予想以上に「美術史」とリンクして理解が進みやすかったのには驚いた（あくまで個人的な見解だが）これまでどちらも「なんとなく難しそう」と、どちらかと言えば敬遠していた分野だったからこそなおさらだった。

結果、西洋美術ではこれまで「ルネサンス」「文芸復興」は人に合った建築を考える所から始まった”としか話していなかった事に、では「何故そういった考え方が生まれたか」も背景として補足して説明できる様になったり、なんとなく漠然と捉えていた日本の「伝統芸能」について、能や歌舞伎、茶道や華道が相互に時の権力者と結びついたり、離れたりして明治以降も続いている過程を理解した事で、日本美術史を話している時に感じていた歯切れの悪さが緩和される事に繋がったりもした。

とはいえ、では専門的な所まで「哲学」「伝統芸能」を理解しているのか？と言えば、そこまで深く掘り下げた訳でもないで「専門家」の方には勘弁してほしい。僕が必要としていたのは「美術史を正しく話す為の」あくまで補強として、「哲学」については「時代時代の西洋の思想的背景」として、また伝統芸能に関しては「日本における美術の土着性、特殊性」を理解する為の部分のみが必要だったからだ。

一方で継続した課題としては「西洋美術史」は前述の様に資料が揃いつつあったが、今現在まで「日本美術史」に関しては、ご存知の通り「絵画などの平面作品を軸に話せる」「西洋美術史」と違い、またそもそも「西洋美術史」があってこそその後付けの(あるいは”こじつけの”)美術史とも言えるので、適切な(僕にとって)わかりやすい軸となる資料を見つける事ができていない事だ。これについては「それでも」今後なんとか何冊かの本から抜粋して、オリジナルの資料として整理、編集しないといけないと思っている。

そして、これも「始めた」からのアドバイスと好意的に受け取っているが、美術界隈の方から「あなたのしている事は鑑賞の押し付け。今は対話型鑑賞が主流」といった意見への対応も問題だった。こちらについても「具体大学」の座学としての講座形式が2014年からの3年間でそれなりに完成しつつある今だからこそ、本年度、2017年度は一度講座自体を中止、一年間今度はひたすら「美術館に行こう！」と不特定の参加者と訪れては感想を自由に語り合うツアーを実験的に行う事でチャレンジしているところである。



いずれにしても補強する事や改善する事は、他にも講義後に毎回行ってきた様々なワークショップの内容についても見直しする必要があるのでは？という事も含めて沢山あるけれど、「美術史を学びたくて」と続けていく中で、見ず知らずの芸大生やデザイナーの方達がふらりと参加してくれるようになってきている最近「潜在的なニーズ」に対する確かな手応えと”さらに良い内容にしてければ”というプレッシャーが僕の中に同時に生まれ始めている。

ひとまずの終わりに、こうして「なんとなく美術館に足を運んでいた」2014年当時の0の僕から「独学で自分なりに美術史を学んで、話して」1へ、そんな2017年の僕があらためて今年、頻繁に美術館を訪れる中で新鮮に感じ始めている自分自身の変化について幾つか触れておく。



1つは過去の美術作家の「エピソードや時代背景」を学んだ事で、時代を越えた親近感を覚え始めた事だ。昔はなんとなく紹介文を眺めながら”すごい人”だと漠然と、そして遠くから眺めてきたが、今の僕は「その時代において、できる限りの表現に最大限挑戦していた」身近な先輩や友人の様な、そんな話しかけたくなる様な親しげな存在として眺める様になっている。

2つ目としては「他の作家、美術との関係性」がわかる様になった事で、美術館の学芸員さんが、どの様な意図をもって作品を展示しているかを勝手に推測して楽しめる様になった事だ。以前だとただ順路に沿う形で眺めていたが、今は「どうしてこの場所にこの作品が」「なぜこの順番で」など、学芸員さんの気持ちや立場になって考える様になった。もちろん答えを確かめたわけで

はないが、それでも構わず楽しめる様になってきている。

3つ目としては過去の美術史を学んだ事で、いわゆる現代の作家達の「現代アート」作品への理解も進む様になった。村上隆さん風に言えば「コンテクスト」。いわゆる過去の美術史文脈を理解した事で、その延長線上で考えている作家の考えている事、作品に込めている意図についても推測できる様になってきたのだ。これは難解な方向へと進んでいる今の現代アートを理解する上でやはり大きく役にたっている。

こうした様々な変化は、おそらく専門的な美術教育を受けた人や美術を職業としている方から見れば、当たり前すぎる事なのかもしれない。ただそれでも自分なりの形で、その感覚を自分の眼差しとして「獲得」できた事は「専門的な教育を受けた事もなく職業にもしていない」ただのサラリーマンの自分にとって「人生の楽しみ」として、やはり財産となっている。

ここまで読んでくれた人が「0から美術を学ぼうとしている」のか「誰かに美術に興味をもってもらいたい」と考えているのか、僕としてはわかりませんが。「美術を身近な存在にする為の」一つの取り組み事例として何かしらの参考になっていれば幸いです。

そして、来年度、2018年以降のスケジュールに関してはまだ「どういった形」講義という座学、体験的なワークショップ、そして鑑賞の為の美術館巡りといった内容のバランスをどうすれば適切なのか？と決めかねている部分もあるのですが、この「具体大学」という取り組み自体に関しては引き続き継続していきますので、もし良かったら参加してご意見や感想をくれるとありがたいと思います。

また、ここまで書いてきて、僕自身も「東洋美術史」「写真美術史」などなど、まだまだ学び足りない領域部分に対する学習意欲が初心に戻った様な気持ちで沸々と湧いてきています。どこかの講座を受講していたり、読書している時にお会いしたらその時はよろしくお願いします。

最後に。この「具体大学」はそもそも「美術はそれぞれが好きに様に、自由に」とされがちな事への個人的な不満、そして同様の不満を感じる人が周囲に何人か実際にいた事から「問題」と感じて始めたプロジェクトなのですが、自分自身という存在を使って「0から自分の為に、誰かの為に。それでも美術を具体的に学びたい」という数年間の「実験」の途中結果としては、やはり僕は「それぞれが好きに様に、自由に」の前に、ある程度「正しいとされる」歴史という基本を学ぶ事は（例えばスポーツを会場に見に行く前に簡単なルール位はわかってから行くのと同じ位）「楽しむ為の」ルールとして必要だと、結論としてやはり感じている。

そしてそれは、最近よく行われる「対話型鑑賞」。1980年代にアメリカの美術館で子供の思考能力や対話能力の向上を目的として始まった（＝専門家が一方的に知識を押し付ける鑑賞方法を行わない）と「どちらかが良いのか？」として対立したり、否定しあうという構図ではなく、あくまでその前の「前提としての最低限の知識共有」の必要性を述べていると思っているのだが。。

あなたはどうか？（。。続きは美術館でお話しましょう）



## ミカタをマナブ

<http://p.booklog.jp/book/117739>

著者：田中 冬一郎

ワオンプロジェクト設立者／ファイナンシャルプランナー  
／終活カウンセラー／素人作家。

目の前の誰かのセーフティネットになる事を目指し、  
2007年にワオンプロジェクトを設立。他NPOのプロボノも

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/117739>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト